

〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263)53-8802

FAX (0263)51-1290

E-mail: sogokyoiku-kikaku@pref.nagano.lg.jp

目次

「調査研究事業の報告について」…………… p.1

「調査研究事業の報告(調査研究Aチーム)」…………… p.2,3

「調査研究事業の報告(調査研究Cチーム)」…………… p.4,5

調査研究事業の報告について

しのめ190号(2月号)・しのめ191号(3月号)では本年度の総合教育センターにおける調査研究事業の成果をお伝えします。

3月末には、関連する資料等もセンターホームページに掲載します。是非ご覧いただき、参考・活用していただければ幸いです。

教育センターホームページ(URL): www.edu-ctr.pref.nagano.lg.jp

長野県総合教育センター
Nagano Prefectural Comprehensive Education Center

〒399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4
☎ 0263-53-8800 (代表)

POWERED BY 

サイト内検索



HOME



総案内



研修/生徒実習



学校支援



調査研究



教育情報



教育相談



ダウンロード



アクセス

HOME ▶ 調査研究

「調査研究」のページ
に掲載します。
(3月末予定)

※探究する授業：「問いのある授業」が充実し、発展的に連続することで実現する（「令和6年度 教育課程編成・学習指導の基本」p. 3、長野県教育委員会）

研究の要旨

令和6年度教育課程編成・学習指導改善の取組みの一つである「探究する授業」の実現に向けて、本研究チームでは、県内公立中学校を対象に、探究的な学びを支える学校の取組みや、教科学習の実態、教員の意識を調査した。調査結果から、教科学習における探究的な学びを支える上で、以下に挙げる学校・教師の取組みが大切であることが見えてきた。

【学校・教師の取組み】

- ・探究的な学びをイメージしやすいように校内で定義付け、教職員間で共有し、納得感をもって実践する
- ・生徒の素朴な疑問や考えを尊重し、問いに対して個々が見通しをもって追究できるような手立てを講じる

さらに、探究的な学びの充実に向けては、次のような方向性が示唆された。

【方向性】

- ・各教科の学習過程と内容等も踏まえて、「習得・活用・探究」の学習場面を具体化すること
- ・生徒が学ぶ過程で教科の奥深さを味わえるように、教師の専門性の向上に努めていくこと

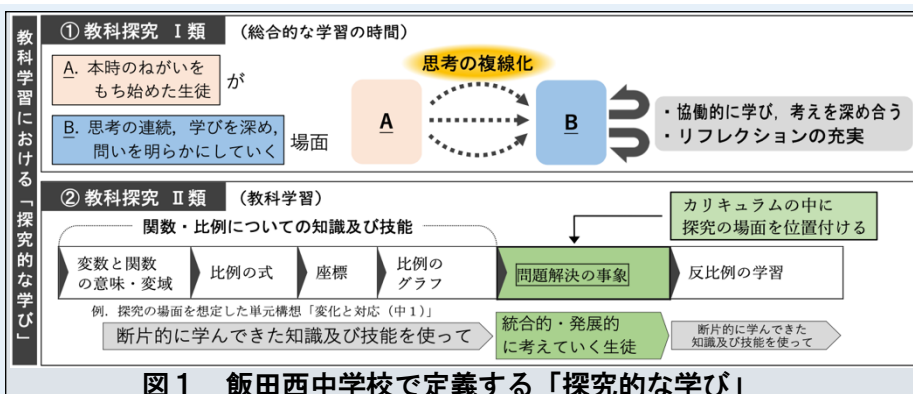
キーワード：探究的な学び、学習過程、問い、見通し、教師の専門性

調査内容

本調査は、飯田市立飯田西中学校を対象に実施し、令和6年7月5日（金）に授業視察、後日、意識調査を行った。

1 探究的な学びを支える学校の取組み

飯田西中学校では、令和4年度から現在に至るまで、「探究的な学び」を意識した授業改善に取り組んでいる。特徴的なことは、学校として「探究的な学び」とはどのような学びを指すのかを定義し、拠り所としていることにある（図1）。



飯田西中学校が定義する「探究的な学び」と、県で定義する「探究する授業」はつながるものとする。

図1 飯田西中学校で定義する「探究的な学び」

しかし、すぐに「探究的な学び」を定義付け、共有できたわけではない。まずは、組織として目指す方向が揃うように、教職員の負担を軽減する環境づくりと、研究や研修に向かう教職員の意識の醸成が必要であったことから、管理職や研究部が中心となり、以下のような取組みを行ってきている。

- ☑ 学校訪問支援の派遣要請……主事と教職員との関係を深め、校内の教職員同士が共に考え合う機会を増やすことで、授業を見合うことへの抵抗感を減らす。
- ☑ ちょっと研修講座……職員会議の前後15分を活用し、「問いとは」「学習問題と学習課題の違い」「リフレクションとは」「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』」「探究で大事にしたいこと」等、全教科に通じる授業改善の視点を学び合う。
- ☑ 早く帰ろうキャンペーン……会議時間を守り、議題の精選を図る。
ICTを活用し、業務効率化を推進する。

→ 授業の話題が飛び交う職員室の実現、超過勤務の削減等の改善が顕著になった。

2 教科学習の実態

参観した授業のうち、本稿ではT教諭の実践を紹介する。2年生の数学では、「連立方程式の利用」の単元で、生徒自身が生活に関連する問題を考え、作問する活動（図1：②教科探究Ⅱ類「問題解決の事象」）を行った。学習問題「連立方程式の利用問題を作ろう」に取り組む二人の生徒の追究と結果を比較すると、それぞれのアプローチは異なっていた。

Aさんは、自分で考えた情報だけでは解が得られないことに気づき、問題設定を変更した。Bさんは、新たな条件を加えることで解決策を見いだした（図2）。自ら条件を調整しながら試行錯誤する生徒の姿から、「断片的に学んできた知識及び技能を使って、統合的・発展的に学んでいく」という飯田西中学校で考える探究的な学びにおける生徒の姿（図1）の一端を垣間見ることができた。

Aさん

50円の消しゴム
200円のノート
70円の鉛筆

合計15個買って、金額1660円

$x + y + z = 15$
 $50x + 200y + 70z = 1660$

計算してみたが・・・解けない・・・

3つの解を諦めて
消しゴムと鉛筆の2つに変更

Bさん

バスケットボールの3点シュート
2点シュート
1点シュート

合計18本入って、得点40点

2点シュートの本数は総得点の4分の1

$x + y + z = 18$
 $3x + 2y + z = 40$

$y = 40 \times \frac{1}{4} \rightarrow y = 10$
 $x = 6 \quad z = 2$

3つの解の問題が作成できた！

Bさんは、数量関係のヒントが3つあれば、3つの解の問題を作ることができると気付いている。新たに設定した問題へと統合的・発展的に考察することに繋がりそうだ。

図2 AさんとBさんの追究と結果の比較



専門主事C



専門主事D

【T教諭の実践に学ぶこと】

こうした生徒の探究を支えたのは、T教諭による次のような手立てがあったからだと考える。

- ・ウォーミングアップ問題（前時の復習）
学習問題の解決に向けて、ウォーミングアップ問題を提示し、「問題を作る上で、どのようなことに気を付ければいいかな？」と発問し、学習課題につなげた。生徒が追究する際のポイントを明確にし、見通しをもてるようにした。
- ・生徒の素朴な疑問や考えを尊重する姿勢
生活事象を基に「解が3つでも解けるかな？」と疑問を抱き、作問に挑戦しようとする生徒の姿を否定せずに尊重した。数学的にどのような工夫が可能かを一緒に考えた。

3 教員の意識

日々の授業づくりに関する教員の意識を把握するため、Google フォームによるアンケート調査を実施した。質問項目は二つ設定し、一つ目の「教科学習で意識して取り組んでいること」では、8つの選択肢から該当するものを複数選択し、その具体を記述する形式とした。二つ目の「探究的な学びを進める上で感じている課題」では、自由記述形式とし、教員の具体的な考えや経験を収集できるようにした。

以下の表は、回答数が多かった選択肢及び多く挙げられた意見をまとめたものである。

1 教科学習で意識していること		2 探究的な学びを進める上で感じている課題	
該当する選択肢	記述例	意見の分類	記述例
生徒が問いや願いをもつこと	・予想を出し合う雰囲気づくり ・導入での人や事象との出会い	授業時間の確保	・教科書の範囲が終わらない ・新たな問いを追究する時間がない
生徒が追究したことをまとめたり、表現したりすること	・追究した結果を表等にまとめる ・個別に考えたことを相手に伝える ・自分なりの答えを記す	教科の特性	・単元等によっては探究が難しい
生徒が自身の学びを振り返ること	・単元や題材を通した振り返り ・振り返りの共有	学習意欲の喚起	・受け身になりがちな生徒がいる ・生徒が自分で計画、進行できない

表 アンケート調査から得た教員の意識（N=10）

表から、飯田西中学校では、授業の導入から終末まで、生徒が主体となるように意識して取り組んでいる教員が多いことが分かる。一方、探究的な学びを進める際、「授業時間の確保」や「教科の特性」に対して課題を感じる教員も少なくない。このことから、校内で探究的な学びを定義した上で、各教科の学習過程に照らし、どの内容等で実施できそうかを一層明確にしていけることが必要だと考える。また、受け身になりがちな生徒の存在を認識していることから、現在の取組みを一層充実させていくとともに、生徒が学ぶ過程で教科の奥深さを味わうためにも、教師の専門性の向上は欠かすことができないものと考ええる。

「新たな教師の学び」実現に向けた校内研修の充実

【研究の背景】

「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「探究的な学び」等をキーワードに、子供たちの学びの改革が進む中、教師にも主体的・探究的に学び続ける姿勢が求められています。特に、現場を含むあらゆる経験を生かし、他者との対話や自身の振り返りを通じて教員同士で学び合う「協働的な教師の学び」が重要視されています。このことは、「教師の学び」と「子供の学び」が相似形であることを示しています。

【研究の目的】

本研究では、教師が主体的に研修に取り組み、新たな知識や技能を得るだけでなく、先生方のあらゆる経験を基に学び合う研修の在り方を検討します。そのために、センター所員が、「**研修講座の運営**」をテーマにして対話を行い、その考察を今後の研修運営に反映します。さらに、先生方が校内で学び合いを深められるよう、**経験と対話を基盤とした具体的な校内研修のアイデアを提案**します。

【既に多くの受講者が『共に学び合うこと』の価値を実感していた】(R6 研修講座ふりかえりから抜粋)

- 自分一人で考えることが多い現場の仕事ですが、同僚に相談することで新たな価値観に気付くことができました。(15 年目)
- 先生方にご意見を伺えたことで自分の中でひらめいたことがありました。(6 年目)
- 子供の実際の姿をとらえることの難しさに悩む同じ仲間がいることに気付き心強さを感じた。
- 話題にした事例や教材・教具の紹介等のグループ協議の中で、自分にはなかった考えやアイデアを聞くことができ、自分の中で改善方法を見つけることができた。(1 年目)
- ほかの受講者と話をしたり自分の実践を振り返ったりする中で、自分が無意識に行っていた資料提示や机の配置なども意識することで立派な環境設定になることに気付きました。(1 年目)

【プラクティカル・リフレクション・シート (PRS) を使った対話】

研修において、対話を用いることは多くあります。しかし、「実践」や「行動したこと」が対話の中心になりやすく、話し手の内面（価値観や思い）まで触れられることは多くありません。

そこで、以下のように「プラクティカル・リフレクション・シート (PRS)」と名付けた各自の実践を振り返るシートを使って、センター所員が、実験的に互いの経験を基にした「軸」や「根っこ」に触れるような対話をしました。

PRS は事前に記入し、対話の始めに配って読み合います。PRS の特徴は、自分の思いや願いをはじめ、プラス面とマイナス面を素直に自分の言葉で綴ることです。言語化することで、自分の思いの背景が整理されます。

また、「もやもや」を言葉にすることで、これまでなかなか聞くことがなかった同僚の考えに触れ、お互いの実践の土台となる「価値観」を新たにします。各自が PRS を持ち寄ることで、より対話が深まり、わずかな時間であっても協働的な学びにつながると考えました。

〔対話で大切にしたいこと〕

- ・話している人に関心を持ち、「経験」「思い・願い」「習慣・癖」「背景」「感情」「こだわり」「価値観」「人生観」「見方・考え方」等について、PRS をきっかけにして知りたいと思ってきく（聴く・訊く）。
- ・発言に対して否定をせず、その発言の背景をきく。
- ・自分と照らし合わせてきく。

プラクティカル・リフレクション・シート (PRS)

部 氏名	
研修講座への思いや願い	
受講者の姿 自分の姿でよかったところ	受講者の姿 自分の姿でうまくいかなかったところ
もやもや	

【PRS を活用し対話を行ったセンター所員の感想】

- ・失敗までいかない「もやもや」を言語化する・開示する・共有することの重要性。その点で、今回のシートはとても画期的だったと思う。
- ・自分の視点でしか見えていないことが、ほかの人からの視点が加わると、ネガティブがポジティブな見方に変わるということを教えてもらった。
- ・考え方や捉え方は、やっぱり人それぞれなんだということを再認識。だから話し合うことが大切だとの考えに至る。
- ・自分が「もやもや」を感じた事象について、他の人が違う受け止め方をしていたことが印象的だった。また、具体的なアドバイスではなく、他の人の価値観からくる感想を聞くことで、自分の中で新たな考え方やアイデアが浮かんだ。他の人の感想を触媒にして、自分の中で探究のサイクルが回ったようなイメージ。
- ・「失敗を話しても批判されない、内容がまとまっても話していい」という雰囲気をつくるなど、心理的安全性が確保されていたことがよかった。



【PRS の活用例】

活用事例をいくつか紹介します。シートには、整った文章を書く必要はありません。箇条書きやメモで十分なので、もやもやしていたことも含め、先生方の思いに広く触れ、お互いの価値観に学び合える対話につなげていきましょう。

【活用事例1】 カリキュラム・マネジメントについて学び合う校内研修での活用 →教職員が主体となり、よりよい学校のあり方について対話する場面

『学校運営に対する思い・願い』とそれにつながる具体的な児童生徒や自身の良い姿や見つけ直したい姿、それに対する自分の中の『もやもや』を、PRS に記述して対話する。学校や児童生徒に対する多くの先生の思いを共有することで、学校づくりに役立つと考えられます。

【活用事例2】 学年会での活用 → 日々の児童生徒とのかかわりについて対話する場面

『学年運営に対する思い・願い』『学級経営に対する思い・願い』とそれを基にした実践での具体的な児童生徒や自身の良い姿や見つけ直したい姿、それに対する自分の中の『もやもや』を、PRS に記述して対話する。自分とは違った見方で学年や学級の児童生徒を捉えている他の同僚との対話を通して、その後の学年運営や学級経営に生かすことができると考えられます。

その他にも自校の学校目標や児童生徒の実態に合わせたテーマを設定してみましょう

- ・『授業づくり』 日々の授業で大切にしていることやうまくいかないこと
- ・『児童生徒同士の関係づくり』 工夫していることや難しいと感じていること
- ・『タイムマネジメント』 時間を生み出すために工夫したことや苦勞したこと
- ・『地域とのつながり』 地域とつながりうまくいったことやつながることの難しさ

実はみなさん
モヤモヤしていることが
たくさんあるはずですよ



【まとめ】

多様な経験をもつ先生方が、自分の経験や実践から得た思いを対話し、お互いの価値観に触れることで、相互理解や同僚性の向上につながります。また、自分が普段考えていないことや気付いていないことへの新たな気付きが生まれ、自分の実践を問い直す機会になります。そのことが、変化を前向きに受け止め、自分の教育にかかわる価値観を更新していく教師の姿につながるものと考えます。このような教師の姿が、子供たちの学びのロールモデルになります。

校内研修の際は、価値観に触れ合う場を意図的に設けることで、先生方の学びがより豊かになっていきます。センター所員の学びの事例を手掛かりに、今の校内研修を少しでも充実させてみませんか。今後も、センター研修と学校の学び合いをつなげる工夫をさらに研究してまいります。